

「令和4年度地域マネジメント教育研究プロジェクト報告会」について 「鹿児島近現代」教育研究センター 副センター長 西村 知

本センターの事業は、文字資料や写真、音源などの文字以外の資料を収集し、史的アプローチにより、鹿児島の近代をより深く理解することと、現代的な課題を解決する文理融合、分野横断的な実践的教育研究プロジェクトを行うことを二本柱としています。後者については、初年度の令和4年度は、12の「地域マネジメント教育研究プロジェクト」を行いました。テーマは、文化創生、食、観光、女性、外国人などに関するものです。研究分野は、経済学、社会学、考古学、教育学と多岐にわたっています。また、対象とする地域も、奄美群島、指宿市、霧島市、鹿児島市上町地区と鹿児島県の広い地域をカバーしています。

この研究成果の報告会が、令和5年5月20日（土）に、鹿児島大学郡元キャンパス学習交流プラザ2階学習ホールで、午前9時半より正午まで行われました。まず、ポスター報告が行われ、その後、四人の研究代表者により、研究報告が行われました。

奄美大島から、奄美島唄に関するの報告を遠隔で行った梁川教授は、カセットテープなどの音源の収集、保存の重要性を強調しました。澤田准教授は、沖永良部島における自給用バナナの栽培状況に関して、マッピング結果を用いて報告しました。この調査は、法文学部の学生とともに行われたものであり、教育効果も高いと思われます。島の自給率を上げるためには、自給用バナナなどの農作物の実態を把握する必要があるということが、研究のモチベーションになっています。ポスター報告では、西村教授は、共同研究者である中谷教授、日高特任助教との共同研究に関する報

告を行いました。この研究は、沖永良部島の多様な主体が近代から現代の社会経済、教育にいかなる影響を与えてきたかを明らかにするものです。西村教授は、外国人女性、中谷教授は女性、日高特任助教は医者に焦点を当てました。

今後は、各プロジェクトと収集された資料を総合的に関連させることによって、鹿児島の近代を基礎とした地域貢献型の教育研究プロジェクトを行っていくことを計画しています。地道な資料の蓄積とそれを基礎とした地域マネジメントプロジェクトは、鹿児島だけではなく、全国、全世界に誇ることのできる地域創生のモデル構築につながると思います。

本センターの特徴は、日本の近代化において大きな貢献をもたらした薩摩、鹿児島の歴史をこれまでとは違う視点から捉えることです。私個人は、経済学者であることもあり、鹿児島の産業の近代化の歴史を現代まで繋げて考察していきたいと考えています。重化学工業化、県民所得の向上という指標だけを見ってしまうと、薩摩・鹿児島は、島津の集成館事業で、発展が止まっていると捉えられてしまうかもしれません。しかし、過度の公害問題をもたらさず、農業を守り、自然循環型の産業を重視してきた鹿児島の近代・現代は、身の丈のあった持続的産業発展を実現している地域として再評価することもできるのです。このセンターが収集、保管する資料、研究プロジェクトが未来型の地方の豊かさの創造に貢献することを期待しています。